

一茶と尾張・三河の俳諧師 — 一茶「差添」俳諧番付の信憑性をめぐり —

青木 美智男

(日本福祉大学知多半島総合研究所 顧問)

はじめに

私はかつて「ランクづけされる文化人—とくに俳諧番付を中心に—」(林英夫・青木美智男編『番付で読む江戸時代』柏書房、2003年)という江戸後期に刊行された俳諧師の見立番付に関する分析をしたことがある。そして番付のランクづけはかなり信憑性が高いと結論づけたが、確信はなかった。そこで今回それに迫る新たな挑戦を試みるものである。

次頁で紹介するのは、文政4年(1821)に江戸(浅草竹門 大黒屋文吉版)で刊行された『誹諧士角力番組』という近世後期の俳諧師をランクづけした見立番付である。

番付は「東の方 諸国」と「西の方 江戸」に分かれていて、それぞれ5段に俳諧師がランクづけられて並んでいる。そして「東の方」では全国32ヶ国の著名な俳諧師70人(2名が2度登場)が紹介され、「西の方」には、江戸の俳諧師が同じく70人がランクづけられている。

その東西を分ける中央の部分を「柱」といい、そこには相撲番付と同じく、上から行司・世話人・差添・勸進元の名前が刻まれるのが普通である。つまりその「柱」の部分のみを拡大すると、下記のようなになる(119頁参照)。行司・世話人・差添・勸進元は、判定役・差配役・協力者・興行主という役割であるが、ここに名を連ねるのは、いずれも文化・文政期を代表する俳諧師ばかりである。

たとえば行司の浅草の護物は、伊勢の人だが、

江戸に住み、金沢・江戸・京都に遊んで士朗・道彦・闌更らに師事した俳諧師である。また陸奥の乙二は、陸奥白石の著名な寺院の生まれだが、芭蕉・蕪村を畏敬し、蝦夷地・東北・北陸を漂泊しながら、江戸の成美や道彦・闌更・一茶らと交友した俳諧師である。そして長斎は、大坂で船宿を経営しながら、漢詩・国学にも長じた当時上方を代表する俳諧師である。

こうしたなかに「差添」の一人に一茶の名が見られる。一茶は今でこそ松尾芭蕉や与謝蕪村と並び称される、近世を代表する俳諧師の一人で、慈愛に満ちた俳風で知られるが、文政4年(1821)といえば、一茶59歳の時で、江戸から故郷信州水内郡柏原宿に戻って7年、善光寺門前やその周辺の門人宅を巡り歩いては句会を開き、1年間に1320句近い句を詠むほど、俳諧師としては円熟した時期には違いないが、一介の田舎宗匠でしかなかったと思われても仕方がない存在だった。そんな一茶が、なぜ俳諧番付全国版の「差添」として中央の柱に名を連ねているのか、という疑念が浮かびあがってこよう。

しかし一茶は、その後刊行された文政6年(1823)の『諸国流行俳諧行脚評定』には行司として、同時期に刊行された『正風俳諧師座定配図』には、なんと勸進元としてその名が刻まれている(119頁参照)。それゆえ、一茶研究の第一人者である矢羽勝幸さんは、それは当時一茶が俳諧師仲間の中では著名な存在だったからではないかと推

行 司		世 話 人		差 添		勸 進 元	
浅草	ゴブツ護物	播州	キョクシヤウ玉屑	信州	イッサ 一茶	大坂	キエン 奇淵
陸奥	オツジ乙二	江戸	シサン芝山				
大坂	テウサイ長斎	奥州	ヘイカク平角	江戸	キトウ 其堂	尾州	チクユウ 竹有

謀諸士角力番組 文政四年巳年 改正 黑白山人著

東の方諸國

甲列	三列	奧列	藝列	京都	大坂	豐都	京都	尾列	京都
ラニカイ	タタキ	ワキヤウ	トトラ	ユキヲ	ハレワ	キレト	カノロ	カノロ	タウキ
嵐	阜	素	篤	雪	万	椿	茗	岳	月

外池	郷老	雄和	堂	此	輅	居
信列	大坂	大坂	京都	大坂	三列	陸奥
信列	大坂	大坂	京都	大坂	三列	陸奥
信列	大坂	大坂	京都	大坂	三列	陸奥

嘯	巴	郎	鳥	眉	暑	價	亭	人	々	舉	草	淵	項	齋
信列	信列	相列	相列	大列	長列	真列	信列	河列	旗列	京列	京列	丹列	下列	長列
信列	信列	相列	相列	大列	長列	真列	信列	河列	旗列	京列	京列	丹列	下列	長列

常	水	雅	譜	風	々	人	非	插	渝	雅	後	嬌	彦	風
武列	甲列	上列	尾列	尾列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列
武列	甲列	上列	尾列	尾列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列

村	守	十	大	鷓	陽	隱	考	考	人	蛙	彦	考	毛
情列	若列	日列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列
情列	若列	日列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列	伊列

為御覽

行 護 乙 長

物 世 掛 玉 骨 差 齊 人 貞 列 好 平 角 山 添 芦 其 堂 元 進 勸 尾 列 竹 奇 者 淵

茶 堂 元 進 勸

尾 列 竹 奇 者 淵

西の方江元

濱	下	善	谷	江	谷	中	橋	高
ラニカイ	タタキ	ワキヤウ	トトラ	ユキヲ	ハレワ	キレト	カノロ	タウキ
嵐	阜	素	篤	雪	万	椿	茗	岳

門和	瓢	里	山	第	麥	兩	笠	松
信列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列
信列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列	大列

堂	輅	谷	山	元	阿	山	道	山	水	山	春	末	月	南
信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列
信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列

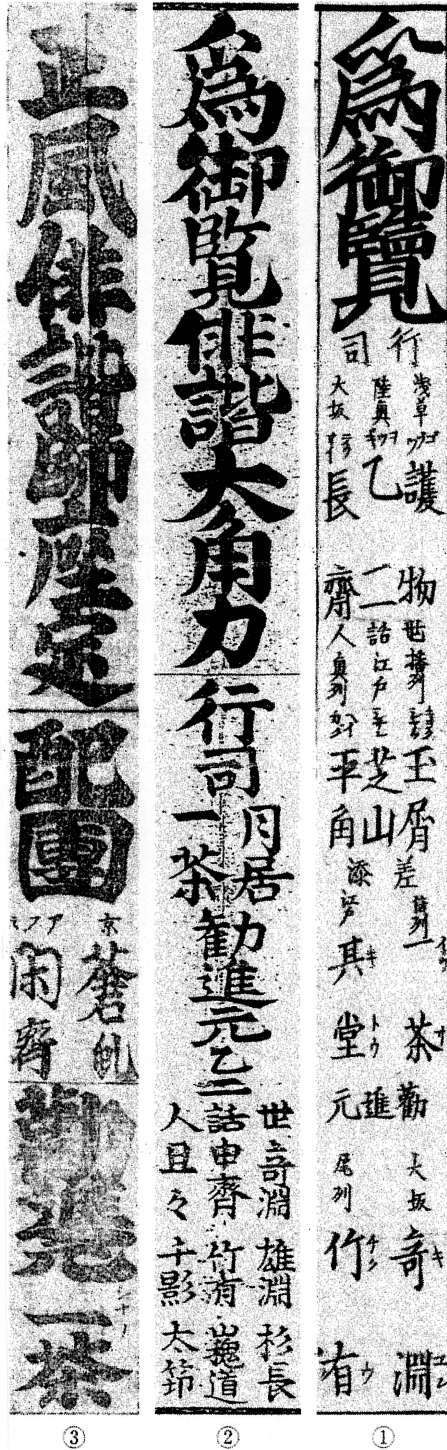
雨	話	阿	々	水	風	論	華	羅	々	山	風	々	國	醉
江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列
江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列	江列

頂	鬼	代	聖	草	聖	玉	葉	門	石	帆	泉	明	堂
信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列
信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列	信列

(出典 矢羽勝幸編『一茶の総合研究』口絵)

俳諧番付のなかの一茶の位置

ここに示した図①～③は、①文政4年(1821)版の『誹諧士角力番組』(版元浅草竹門 大黒屋文吉)、②文政6年(1823)版『諸国流行俳諧行脚評定』(版元不明)、③文政5～6年版『正風俳諧師座定配図』(版元不明)の東西を分ける中央の柱の部分である。①では下から2段目「差添」右側に一茶の名がみえる。②には「行司」として左側に一茶がいる。③は最下段「勸進元」に一茶の名がある。「差添」「行司」「勸進元」は、相撲の場合と同様、番付作成の協力者・判定役・興行主の役割を意味している。それぞれ番付の信用にかかわる立場にいたので、俳諧の世界でもかなり知られた人物が名を連ねる。その点で一茶は、晩年、俳諧仲間では押しも押されぬ存在だったことがわかる(矢羽勝幸編『一茶の総合研究』、2002年長野県歴史館特別展示図録『文人墨客がつどう一十九世紀北信濃の文芸ネットワーク』より)。



③

②

①

測されている（「俳人番付から見た一茶」『一茶の総合研究』信濃毎日新聞社、1987年）。その通りであろう。

ただ問題はどのように著名な存在だったのか、ということになる。詠まれる句が高い評価を受けていて、間違いなく当代屈指の俳壇の実力者と誰もが認める存在だったからだろうか。さもなければ多くの門人を抱えていたとか、さらに句集や俳文集などを刊行する本屋と深い関わりがあったとか、などなどが考えられるが、どれも当てはまらないと思う。

もし一茶が江戸で当代屈指の俳諧師であると認められていれば、おそらく江戸から故郷の信州へ戻ることはあり得ないし、江戸で多数の門人を抱えていたとも、深く関わる本屋が存在したともあまり聞いたことがない。

ではなぜそうなのだろうか。もっとも考えられるのは、自分と同時代に全国で活動する俳諧師たちが詠む句に強い関心を持ち、俳諧師としての自分の存在を生涯確認しながら生きてきた情報通で、それを版元が見逃さなかったということではないだろうか。

それには、一茶が40代に入ってもない時期に、一茶の俳諧師としての資質を高く評価し、自らが主催する句会（随齋会）に彼を招いた江戸俳壇の重鎮夏目成美との出会いが不可分に関係している。身体に障害を持つ成美は、各地を行脚して諸国の俳諧師と交わることが困難であった。そこで成美は早くから全国の俳諧師の句を集め、江戸に居ながら各地の俳壇の動静を把握しようと諸国の俳諧情報を収集し記録する作業に着手していた。成美宅に寄宿することが多かった一茶は、こうした成美の作業に大きな影響を受けたに違いない。

一茶は若い時から日本の古典や漢籍から和歌や漢詩を学習することに大変熱心であった。また自らの生活記録と詠んだ句を生涯にわたって書き留めてきた点でもきわめて几帳面な性格の俳諧師であった。その点でも、芭蕉や蕪村らとは異なり、その生涯を自らの記録でたどることが出来る稀有な俳諧師である。

そして同時に同時代に活動している諸国の俳諧

師の動向にも強い関心をしめしていた。その点でそうした情報をもっとも集まる夏目成美に認められたのが幸いした。こうして一茶は、成美が記録していた全国の俳諧師からの集句録を、借受けることに成功し、その抄録を作成する作業に入った。文化8年（1811）、一茶49歳の時である。江戸を離れる2年前のことである。

それゆえ、この書写の作業は大変な作業となったと思われる。そして一茶はその集句録を、成美の別号の一つである「随齋」にちなんで「随齋筆記抜書」（『一茶全集』第7巻、信濃毎日新聞社、1977年）と名づけ書写を開始すると同時に、その上段の部分に自分が集句した句を書き留めていった。それを文政9年（1826）、死の前年まで15年も続けた。とくに文化13年（1816）、成美の死去後は、当初は成美に寄せられた句がややあるものの、以後は一茶自身による集句録集と見てよいだろう。言うなれば、一茶晩年の別号を取って「俳諧寺筆記」と名づけることが適切である。

その「随齋筆記抜書」には、芭蕉や蕪村の他、成美や一茶自身を含めて全部で1150人ほどの俳諧師の句が集句されている。その数は、成美集句分1477句、一茶集句分3195句を合わせると、4672句にも及ぶ。句の大半は成美・一茶と同時代に生きた全国の俳諧師たちの句である。成美の全国俳壇における実力と、諸国俳諧師たちと成美との交流の広さが知れるとともに、成美亡き後の一茶の俳諧情報収集への情熱の凄さと、その情報量の多さと広さを知ることが出来るだろう。

ただ一茶が書写を許されたという成美の集句録そのものは現存しない。また現存する「随齋筆記抜書」にも何丁かの落丁があり完全なものとは言えない。しかし上巻と下巻に分かれているこの記録には、諸国俳諧師との文通の記録や出版物の交換の記事も見られ、集句の具体的過程が明らかになる。その点まさに化政期俳壇の人間関係を鳥瞰できる稀有な記録であると言ってよいだろう。

小林一茶は、65歳の生涯で2万1000句強の句を詠み、さらに俳諧師として認められだした時期から晩年まで、克明な日記を書き留めている俳諧師である。当然その日記の中にも諸国俳諧師と

の文通の記事を散見することができ、「随齋筆紀抜書」の記事を裏付けることができる。

一茶が持つこんな俳諧情報を俳諧全盛時代の江戸の版元が見逃すはずがない。一茶が、俳諧番付の「柱」に名を連ねるのは、文化13年(1816)刊行の『海内俳諧東西三十六歌仙合』と『正風俳諧名家角力組』という二つの番付で、前者は「判者」、後者は「世話人」の一人として登場するのが最初である。後者の「行司」は、道彦・成美・月居ら重鎮ばかりであるが、この年成美が死去すると、以後、一茶存命中に刊行された全国版の俳諧番付には、二、三をのぞき「柱」に名を連ねるようになる。それは成美に代わる全国の俳諧師情報の収集者として、その存在が認められ出したことを意味する。

「随齋筆紀抜書」に集句された尾張・三河俳諧師の句

しかし一茶は、番付の「柱」に名を連ねても、そのことに関してはまったく記録に残しておらず、「七番日記」や「文政日記」から関連する記事を読み取ることはできない。その理由として、本屋が情報通一茶の名を無断で借用して番付の価値を高めようとしたからで、一茶には預かり知らなかった事柄だという推測が成り立つ。また知っているても俳諧師にあるまじき仕事として恥じ記録しなかったことも考えられる。ただどちらにしても、番付に紹介された俳諧師や紹介されなかった俳諧師から、ランクづけをめぐるトラブルが起こされたという話も聞かない。俳諧師仲間からかなり信頼された存在だったのであろう。

では、一茶は番付に紹介された俳諧師たちの句や俳風をどの程度知っていたのだろうか。まずそのことを裏付ける作業を試み、そこから一茶と番付の関わりを推測してみる必要がある。第1表は、紹介した『誹諧士角力番組』の「東の方諸国」に登場する俳諧師たちを国別に見たもので、注目すべきは○印のついた俳諧師が、「随齋筆紀抜書」に集句されている俳諧師であるという点である。68名のうち55名の句が集句されている。つまり一茶は、番付に紹介されている諸国の俳諧師たちの実力をほぼ知っていたことを物語る。

第1表 『誹諧士角力番組』「東の方諸国」国別俳諧師名

国名	俳諧師名(○は随齋筆紀抜書に集句の俳諧師、●はなし。)
京都	○月居 ○蒼虬 ○雪雄 ○梅価 ○定雅 ○木海
大阪	○万和 ○三津人 ●扇暑 ○井眉 ○屋鳥 ○米彦 ○星譜 ○魯隠
長崎	●鞍風
陸奥	○素郷 ○冥々 ○且々 ○雨考 ○日人
上野	○鹿太 ○雄淵
下野	○末左木
武蔵	○太郎彦 ○国村
下総	○雨塘
相模	○雉啄 ●濃水
伊豆	○一瓢
越後	○幽嘯 ○石海
甲斐	○嵐外 ○漫々 ○蟹守
信濃	○八郎 ○若人 ○雲帯 ○如毛
三河	○卓池 ○秋拳
尾張	○岳輅 ○沙汝 ○東陽 ○沙鷗
伊勢	○椿堂 ●推巴
近江	●申齋 ○鳥項 ○千影
若狭	○雲居
摂津	○一草 ●桐栖 ●呉考
河内	○来柜
丹波	○武陵
出雲	●花叔
備中	●晋和
安芸	○篤老 ○玄蛙 ○凡十
長門	○羅風
阿波	●弓雄
伊予	●嵐角
豊前	○了国
豊後	○葵亭
筑後	○文角
日向	●真彦
薩摩	●琴淵

第2表 「東の方諸国」の中の尾・三の俳諧師

上段(10名)	尾州 岳輅 三州 卓池	2名
二段(15名)	三州 秋拳	1名
三段(16名)	なし	
四段(15名)	尾州 少汝 同 東陽 同 沙鷗	3名
五段(14名)	なし	
勸進元	竹有	

ただ現在の私の能力では、番付に載る 68 人の俳諧師全員と一茶の関わりを詳細に分析することが困難なので、今回は、紹介した文政 4 年版の『俳諧士角力番組』の勸進元の一人である尾州竹有や、そこにランクづけされている尾張・三河（以後「尾・三」と略す）の俳諧師について、一茶がどれほど彼等の俳風を知っていたかを見るに留めざるを得ない。

では『俳諧士角力番組』にランクづけされている尾・三の俳諧師が何人いるか、見てみると第 2 表のようになり、68 名の内 6 名で、勸進元の竹有を加えると 7 名になる。

ではこれら 7 名の俳諧師について一茶がどれほどの情報を持っていたのか「随齋筆記抜書」に集句されている尾・三の同時代の俳諧師たちの句を紹介して具体的にしてみることにしよう。

前述したように「随齋筆記抜書」には、成美が集句した句と一茶が集句した句の双方が書留められているので、そこで成美が集めた句を「美」、一茶が集めた句を「茶」として区別し、アイウエオ順に紹介してみよう。以下のようになる。

1 逸人・足彦（尾張）

ちつぽけな ものさへ今は 冬木立 (美)
 参内や 侍烏帽子 ほとゝぎす (美)
 湯上りの 爪きればちる けしの花 (美)
 鳶の声 辻堂ははや 時雨けり (美)
 人遊べ 凧の糸さへ たむる日を (茶)
 一ツ家に 鶏の目ほそし 春の雨 (茶)

〔足彦と改号〕

思ふ図の やうに花あり あらし山 (茶)

逸人伴 路郭

春の夜や 手紙よみつゝ 人の行く (茶)
 しひられて 遊ぶや春の 山の家 (茶)

2 臥央（尾張）

春の人 是も柳に かくれけり (美)
 火桶抱て 片寝がち也 小夜あらし (美)

3 岳輅（尾張）

死残る 人のおほさよ 盆の月 (美)
 梅盗む 人は大かた 月夜哉 (美)
 ほちやほちやと 人は宿とる 時雨哉 (美)
 我国の 鼻柱也 富士の山 (美)
 こしかたを かたるも 花のもどり哉 (美)

目ふさげば 耳にこたへる 須磨の秋 (茶)
 人の家の うらから出たり 春の山 (茶)
 大よくに 花見る雨に 前日哉 (茶)
 仮着せば 上代染ぞ 春の雨 (茶)
 畠中の 人間赤し 秋の風 (茶)
 鶯の 遠音にひらく 小門哉 (茶)
 鰻汁や 行灯提て 人の来る (茶)
 有たけの 紅葉を志賀の 郡哉 (茶)
 こぼれがちに 見ゆるは露の ならひ哉 (茶)
 月澄て 雪降るところ どころ哉 (茶)
 山里に わら家の足らぬ 時雨哉 (茶)

4 宜彦（尾張）

遠晴の するや芒は 八九月 (茶)
 船頭の 越してやりけり 猫の妻 (茶)

5 暁台（尾張）

鶯や 物のまぎれに 夕鳴す (茶)
 白魚や うきよの闇に 目を開き (茶)
 齋僧を けさは雛の 一坐哉 (茶)
 菜の花の はつはつに見る 都哉 (茶)
 涼しくも 明行く月を 照日哉 (茶)
 月と我と 物思ふころ 雲起る (茶)
 さくさくと 粟つく師走 月夜哉 (茶)
 加茂の火を 迹にし先に なく千鳥 (茶)

6 桂五（尾張）

咲出すと 月をもまたぬ 桜哉 (美)
 咲出すと 月をもまたぬ 桜哉 (美)

7 黄山（尾張）

雁帰る 夜や雨もりの 中だるみ (美)

8 五雄（尾張）

梅咲て 壁にかけさす 榎哉 (美)
 頼朝の 御馬の先や 初松魚 (美)

9 沙鷗（尾張）

染草の 赤坂山や 秋の風 (茶)

10 秋挙（三河）

またゝきも ならぬ程行 小鮎哉 (美)
 笋の はへ揃ひけり 茶のけぶり (美)
 鶯の 遠音さしけり 昼支度 (美)
 折枝や 箕に入ておく 梅の花 (茶)
 見た事か 一夜明たら 花の春 (茶)
 鶯の 隙をあけたる はつ音哉 (茶)
 今もちる 花とはしらで さくらかな (茶)

- 野心も たへはてゝ猫の 丸寝かな (茶)
 六月の 雨や人間 口明いて (茶)
 長月や いかなる日にも 菊の花 (茶)
 雪ならで こんな寒は なかりけり (茶)
 一年や 一年ましに 暮はやし (茶)
 梅が香や 今きりたての 濡茶巾 (茶)
 萍に うつるや禰宜の 供廻り (茶)
 葬や 人の葉は はき掃除 (茶)
 温泉けぶりや 空にはいつか 夏の月 (茶)
 木母寺は 蚊もなぐさみや 萩と月 (茶)
 乞食踏んで 米とられけり 鉢敲 (茶)
 巢やあらん 走る雉子の こんかぎり (茶)
- 11 松兄 (尾張)**
- ちるちると 咄すな花の むら雀 (美)
 老木よと 人の撫たる 桜哉 (美)
 思ふことの 空に消へけり 富士の山 (美)
 迂るなら 京迄すべれ 春雨 (美)
 五日の風に十日の雨 (美)
 門違しても 御慶よ 梅の花 (茶)
 あやかりに (脱字か)花に 又ことし (茶)
 暑き日や 折々払ふ 足の砂 (茶)
 餅になれ 月になれとて 田打かな (茶)
 迂るなら 京迄すべれ 春の雨 (茶)
 町中の 山にもたれて 涼みかな (茶)
 老となる 手がらもなくと とし暮ぬ (茶)
 年も名〔も〕 涼しくかしく あなかしこ (茶)
- 12 少汝 (尾張)**
- 鶯に 心あづけし 朝かな (美)
 小雀の 口の広さよ 秋の暮 (美)
 雉の尾の とり廻し見よ 梯子売 (美)
 清滝を 流りけ 雉の声 (美)
 小雀の 口の広さよ 秋の風 (美)
 梅折や 目出度事を 云なから (美)
 雉の尾の とり廻し見よ 梯子売 (美)
 けふも又 目に見る迄の 時雨哉 (茶)
 鶴は蚊よ 亀は虱よ ふじの山 (茶)
- 13 士朗 (尾張)**
- なでしこの 露をれしたる 川原哉 (美)
 走り出て 月に雨はく 小庭哉 (美)
 なくかして 鶯竹に とまりけり (美)
 起々に 花見る宿の 菜汁哉 (美)
- 老たりと けふこそ思へ 雪の笠 (美)
 陽炎を 淋しきものと しらざりし (美)
 けふも見へ 見へけり 不二の山 (美)
 十六夜や 雨もうらなき 葛花 (美)
 夕立や やがて火をたく 藪の家 (美)
 ひよろひよろと 萩に立添ふ かのこ哉 (美)
 日の本は なべて桜の 木間哉 (美)
 落葉たけば めらめらとして すさまじゝ (美)
 卅日の 春や灯の行く うらの山 (美)
 一村が 川汲みに出る 柳哉 (美)
 しもくにも 寝たり花見の 泊り客 (美)
 折角と 消へたる照射 とぼりけり (茶)
 世をいとふ 種や江口の 時鳥 (茶)
 後の月 雨もなんぞの 名残哉 (茶)
 朝な朝な 虱はきだす 御堂哉 (茶)
- 14 岱青 (尾張)**
- 乙鳥は 皆親子哉 婦夫哉 (美)
 直なるも 又一癖や 夕柳 (美)
 いたづらに 過る日も降る 時雨哉 (茶)
 淋しさや 後の一字も 月の影 (茶)
- 15 大蘇 (尾張)**
- 花咲て 置所なき 心かな (美)
 万才に 皆喰れけり 庵の餅 (茶)
 鶯と ともに日暮る 野みち哉 (茶)
 雲と見て 行ば馬籠の 蚊やり哉 (茶)
 秋の夜や 目覚る度に 人通り (茶)
 十六夜や 葎は露も さは(わ)がしき (茶)
- 16 大巢 (尾張)**
- 古郷や 藪からも来る 月の客 (茶)
 まはらせる 柳ありけり 鉢敲 (茶)
- 17 卓池 (三河)**
- 水鳥は 鼻もひらずや 鳩の湖 (美)
 月出て 替ルや海の 鳴どころ (美)
 秋風が 立ば人よぶ 鳥哉 (美)
 夜咄しの もどりにも引く 鳴子哉 (美)
 門の戸に 癖(癖)の付たる 夜寒かな (美)
 寝所を 見せるや槽の もへあかり (茶)
 名月を はれに山家の 祭り哉 (茶)
 夜咄しの もどりにも引く 鳴子哉 (茶)
 雨風に 手すきも見へぬ かゝし哉 (茶)
 一調子 つくや今宵の 萩の声 (茶)

梅持て 尻から這入る 戸口かな 同 (茶)
 反故壳に けふは出やうぞ 花の雲 同 (茶)
 夕顔や つかんで出る 酒の銭 (茶)
 夜嵐や 聞耳立る 猫の妻 (茶)
 青柳や 岬は見へて 一日路 (茶)

18 竹有、塊翁 (尾張)

生て居て うれしや我と けふの月 (美)
 我秋に よく似た物よ 鳴の声 (美)
 思入る 藪の庵も さよ砧 (美)
 よしあしの さたや一駄の 粽草 (美)
 雨の月 あるいて見れば 人も寝ず (美)
 湖や 雉鳴く山の かげがさす (美)
 思入る 藪の庵も さよ砧 (美)
 花によき こと葉づかひや あらし山 (美)
 灯の影に 見れば雨降る 芒哉 (茶)
 遠近や 月を八ツ鶏 七ツ鶏 (茶)
 雨行くや 高根の蟬の 声の前 (茶)
 有明を 柱にあてゝ 煤はらひ (茶)
 春雨の いろは子供や 寺の門 (茶)

〔塊翁と改号〕

蓋とれば 蚊ひとつ寒し 籬の箱 (美)
 としの尾に さはるもの・葉 皆青し (茶)
 春風や ころころ声の 山鳥 (茶)
 牛の尾に 暑を叩く 小壁哉 (茶)
 門前の 婆々は下戸也 初時雨 (茶)

19 東陽 (尾張)

折りかけの 笹など見へて 更衣 (美)
 植る間も はや隠れたし 竹の陰 (美)
 ありく間 花見る人と 成りにけり (美)
 あどけなき 姿や梅の 折上手 (茶)
 草臥て すなほに歩く 柳哉 (茶)
 負て出て 子にも鳴する 蛙かな (茶)
 ちる花の其木の身にも 成て見ん (茶)
 雪丸メ も一ツ返せ 勢田〔の〕橋 (茶)
 月出て 親負ふ人の 通りけり (茶)
 満月に 来ざりし罪も なかりけり (茶)
 糸瓜にも 月ある時や ひとり酒 (茶)

20 杜堂 (尾張)

旅ならぬ 国とてはなし 春(の)風 (茶)

21 梅間 (尾張)

帰雁 はや遠山の(に) 目がうつる (美)

垣の茶の 捨ておくほど 花になる (美)
 時鳥 旅は枕に つかはるゝ (美)
 蚊柱や せんすべなしの 庭せゝり (茶)
 とぶ螢 ことしは橋を はや引し (茶)
 時鳥 旅は枕に つかはるゝ (茶)
 紫苑みな 咲や小縁へ 日が上る (茶)
 瀬頭や 月に声ある 高芒 (茶)
 花呉て 直に門さす 小寺かな (茶)
 沙汰なしに 雨は止みけり はつ鯉 (茶)
 風少 もちて声よき 雲雀哉 (茶)
 人先に 雀のぬける 茅輪哉 (茶)

22 白岡 (尾張)

我思ひ 皆かげろふに 立日かな (茶)

23 方明 (三河)

露さへも むつかしげ也 苔の花 (美)

24 鳳台 (尾張)

月は海に ありて風吹く 青田哉 (茶)

25 木朶 (三河)

つくづくと 四十と思ふ 火桶かな (茶)

以上 25 名が、成美・一茶が集句した尾・三で活動する同時代人の俳諧師名とその句である。その句数は全部で 175 句に上る。そのうち成美が集句した句が 70 句で、一茶が集句したのは 105 句である。一茶のほうが尾・三の俳諧師への関心が高かったことがわかる。

このほか主に一茶が関心を示し集句した尾・三の俳諧師に、芭蕉と深く関わる荷兮(3句・茶)・露川(1句・茶)・越人(1句・茶)らと宝暦期に活躍した也有(2句・茶)や柳居=麦阿(23句・美)の句も集句されているが、本番付を分析するうえで深く関係しないので、ここではその紹介を省略する。

25 名の内、尾張に活動の基盤を置く者が 21 名で、三河は 4 名である。暁台や士朗、卓池など天明期から化政期にかけて全国俳壇をリードする俳諧師をはじめ、化政期の尾・三両国の俳壇を代表する俳諧師たちの句が集められている。つまり一茶は、25 名の尾張・三河の俳諧師の間に交流があり、彼らの俳風に触れていたことを物語る。とくに『俳諧士角力番組』にランクづけされ

ている俳諧師7名についてはすべて、彼らの句を集句し、一応どんな俳風の俳諧師かということを知っていたと見てよいだろう。

「随齋筆紀拔書」に見る尾張・三河俳諧師の略歴

では次に25名の略歴を、『俳文学大辞典』（角川書店、1995年）、鬼頭素朗・伊藤亮三共著『尾張俳人考』（郷土研究奎星社、1940年）、市橋鐸・服部徳次郎編『中京俳人考説』（東海文芸資料刊行会、1980年）、さるみの会編『東海の俳諧史』（泰文堂、1969年）、同『尾三古俳書解題』（研文社1982年）、服部徳次郎『暮雨巷暁台の門人』（愛知学院国語研究会、1972年）、寺島初美『尾張の俳諧』（愛知県郷土資料刊行会、1987年）、『一茶全集』全8巻・別巻1（信濃毎日新聞社、1977-79年）などを参考に紹介しておこう。

- 1 逸人 安永3(1774)～文政12(1829) 尾張枇杷島の富豪。鈴木眼に国学を学び、俳諧を鈴木道彦に師事し、足彦と称した。絵入りの発句集や連句集を多数編集し、俳壇の隆盛に貢献した。
- 2 臥央 ?～文化7(1810) 桜田氏。別号暮雨巷。暁台門。尾張名古屋桑名町の医師。二条家俳諧に執筆を務める。暁台没後暮雨巷を継ぎ、名古屋とその周辺の俳諧愛好者を指導。
- 3 岳略 ?～文政4(1821) 法名釈源恵。尾張名古屋乗西寺12世。本居宣長に国学を学ぶ。暁台門五老の一人。暁台没後、士朗に師事し、多数の発句集・俳諧の連歌(連句)集を編集した尾張俳壇の重鎮。
- 4 宜彦 寛政4(1792)～明治6(1873) 尾張の人。秋挙・卓池に師事し、三河で活動。秋挙23回忌の句集「曙庵句集」の編集者の一人。
- 5 暁台 享保17(1732)～寛政4(1792) 加藤氏。別号暮雨巷。尾張藩士。諸国へ足を運び蕉風復興に尽力。蕪村と並ぶ俳諧師として著名。尾張国内に多数の俳諧師を育成し、暁台門を形成。
- 6 桂五 延享3(1746)～文化9(1812) 金森氏。尾張藩士。佐屋代官を歴任。暁台に師事し、暁台門五老の一人となる。父の追悼集『かれ芦』

を著す。

- 7 黄山 ?～安政元年(1854) 吉原氏。尾張藩士。士朗門。隠居後吟詠にふけり、門人も多数。
- 8 五雄 ?～文政年間(1818～1829)。名古屋生まれの飾師。士朗に学ぶ。「随齋筆紀拔書」に「ヲハリ五雄」とあり、また「尾張 梅間」の句と並んで五雄の句が集句されている。また寺島初巳「士朗とその周辺」には、士朗の古希を賀した『きねうた』に「五雄、三河卓池同携して枇杷園に入、風談やゝあつて三吟をはじめ」とあり、五雄の脇句が紹介されている。
- 9 沙鷗 天明3(1783)～天保14(1843) 森本氏。尾張名古屋戸田町で酒造業を営む。町代を務める。士朗門。高雅で煎茶を嗜み、多くの門弟を持ち、竹有没後随一の俳諧師といわれる。
- 10 秋挙 安永2(1773)～文政9(1826) 中島氏。三河刈谷藩士。士朗門。卓池と並ぶ俳諧師。数多くの俳文集の編集にかかわる。
- 11 松兄 明和4(1767)～文化4(1807) 尾張名古屋西別院内正覚寺12世。士朗の高弟で同門五老の一人。著作に『ななしぐさ』。
- 12 少汝 宝暦9(1759)～文政2(1819) 尾張名古屋本重町常瑞寺7世。本居宣長らに国学を学ぶなど多種多芸。暁台門五老の一人。暁台没後、士朗に師事。
- 13 士朗 寛保2(1742)～文化9(1812) 井上氏。尾張名古屋新町の医師。医業は古法。国学を本居宣長に学ぶほか、絵画・平曲、漢学もよくした。俳諧は暁台に師事し、江戸の道彦、京都の月居とともに寛政の三大家に数えられ、「尾張名古屋やハ士朗でもつ」と蕪村にいわれるほど名声を博し、多くの門人を擁した。死後『士朗七部集』が刊行される。
- 14 岱青 ?～寛政11(1799) 渡辺氏。尾張藩士。本居宣長に国学を学ぶ。暁台門。暁台没後士朗門。
- 15 大蘇 ?～文政5(1822) 高橋氏。尾張大曾根坂上町の紙屑寄商山城屋の主人。士朗に師事し、士朗没後は竹有門。「随齋筆紀拔書」には「白鶴亭 大蘇」とも書かれている。六十一賀集『風の筋』が刊行される。
- 16 大巢 ?～天保8(1837) 高橋氏・平川氏。

尾張熱田の橘屋に入婿。士朗門。離縁後、故郷知多郡草木村と名古屋を往復しながら活動。

17 卓池 明和5(1768)～弘化3(1846) 鶴田氏。

三河岡崎で紺屋を営む。暁台門に入り、暁台没後は士朗に師事。士朗に随行し肥前長崎や上方を旅し、隠居後は悠々自適の生活。門人多数。天保四老の一人。

18 竹有 明和元(1764)～文政12(1829)

竹内氏。尾張知多郡草木村に生まれる。後に塊翁と改名。暁台・士朗に師事。名古屋桑名町に住み、業俳として多くの門人を育成。名家画譜『草名集』を著す。

19 東陽 ? 尾張の人。別号猗々庵。名古屋在住。

士朗門。文化14年(1817)ころ、信州姥捨・善光寺に遊んだ。三・遠・駿紀行の俳文集『うぐひすきこう』を編集。不明な点多し。

20 杜堂 ? 「随斎筆紀抜書」には「ヲハリ杜堂」とある。

21 梅間 安永2(1773)～嘉永2(1849) 岡田氏。

尾張藩士。士朗門。士朗没後、名古屋で頭角を現す。梅画をよくし『梅花帖』を著す。

22 白図 ? ～享和元(1801) 二木氏。尾張名古屋鉄塚町の菓種商。宝暦期尾張俳壇の第一人者武藤白尼や暁台に師事し、暁台の暮雨巷旗揚げに参加した長老的存在で、後に士朗門。

23 方明 ? ～文化5(1808) 阮氏。三河田原藩士。「随斎筆紀抜書」には、「ナゴヤ方明」とある。寺島初巳「士朗とその周辺」には、暁台門から士朗門に加わった俳諧師の一人に、その名を連ねている。

24 鳳台 ? ～天保年間(1830～43)、尾張名古屋宮町の杉山屋の主人。

25 木朶 享保12(1727)～文化7(1810) 古市氏。三河吉田(現・豊橋市)の宿屋主。尾張名古屋の木兎や京都の蝶夢に師事。東三河・西遠江に勢力を持つ。

以上である。『俳諧士角力番組』が文政4年の刊行であるから、このうち、2臥央(文化7年没)、5暁台(寛政4年没)、6桂五(文化9年没)、11松兄(文化4年没)、12少汝(文政2年没)、13士朗(文化9年没)、14岱青(寛政11年没)、21

白図(享和元年没)、22方明(文化6年没)、24木朶(文化7年没)らは、すでにこの世にいない。

文政4年段階で活動していて番付に載る可能性をもっているのは、3岳輅(文政4年没)、4宣彦(明治6年没)、7黄山(安政2年没)、9沙鷗(天保14年没)、10秋拳(文政9年没)、15大蘇(文政5年没)、16大巢(天保5年没)、17卓池(弘化3年没)、18竹有(文政12年没)、19杜堂、21梅間(嘉永2年没)、24鳳台(天保年間没)の10名と没年不明の8五雄(文政年間没)と19東陽の合計12名である。そのうち3岳輅、9沙鷗、10秋拳、16卓池、18竹有、19東陽の6名が番付に載り、文政2年に亡くなった12少汝が没後まもないこともあってか、死亡の情報が伝わらず、その名が載っていることになろう。

一茶の尾張・三河俳諧師からの情報収集

一茶には、生涯の中で尾・三に足を運び、尾・三の俳諧師たちと句会を開いたり「歌仙を巻く」=俳諧の連歌(連句)を催すなど、直接的な交流をした記録はない。せいぜい一茶が30歳の時、西国の旅に出立のさい、江戸から京都へ上るに当たって東海道を利用した程度で、その時の記録もまったく残されてはいない。また帰りは中山道を使ったので尾・三を通過することもなかった。そしてそれ以後も一茶は、尾・三には1度も足を運んでいない。

それは、尾・三の俳諧師に関心がなかったからか、と言えそうではない。一茶は、早くから諸国の俳諧師の動向に関心を示し、西国行脚では上方から四国の俳諧師と交わり、江戸に帰っては江戸俳壇の重鎮夏目成美との関係が深まるや、日本古典の研究や漢詩文の学習にますます力を入れている。なかでも諸国の俳壇のなかにあつて、暁台死後の尾・三の動向には強い関心を持ち、41歳の時には、

竹うゑて 又植にけり 苔の花

(『享和句帖』 享和3年5月30日)

という暁台の後継者である士朗の句を日記に書き

留めるほどだった。そしてさらに

うす雲に 吹合せけり けしの花 ^{ヲハリ} 臥央
短夜の 枕にあてる 野山哉 岳略
(『享和句帖』 享和3年10月14日)

と、暁台にもっとも信頼の厚い暁台門五老の一人である臥央の句や、同じくその一角を占める岳略の句を書き留めるなど、尾張俳壇の状況をつかもうとしていたことがわかる。

そして士朗が尾・三俳壇に重きをなすに至ると、士朗門に属する俳諧師たちの句に強い関心を示し出し、「随斎筆紀抜書」に次々と記録していったのである。

ではその集句の方法の一端を紹介するとしよう。一茶は文化9年(1812)末に故郷信州柏原宿へ帰る。50歳になっていた。そして

是がまあ つひの死所(「栖」と成美が添削)かよ
雪五尺 「七番日記」文化9年

と雪深い生まれ故郷で生涯を送ることを決意し、65歳で亡くなるまで、柏原宿を根城に俳諧師としての活動を続ける。それゆえ、文化10年(1813)以降の「随斎筆紀抜書」の記事は、信州に戻ってからの情報収集録ということになる。

そうしたことを念頭において、文化・文政年間の、尾・三関係の俳諧師に関する情報が集中的に寄せられている部分を見てみることにしよう。〔I〕は大変長文だが、一茶と尾・三の俳諧師との関係を知る上できわめて重要な部分なので、全文を紹介しておこう。

〔I〕

文化七
『玉笹』
文通
紫苑みな 咲や小縁へ 日が上る 梅間
瀬頭や 月に声ある 高芒 〃
花呉て 直に門さす 小寺かな 〃
いたづらに 過る日も降る 時雨哉 岱青
文化十三年二月十六日出、廿九日入、

あどけなき 姿や梅の 折上手 東陽
草臥て すなほに歩行く 柳哉 〃
折角と 消へたる照射 とぼりけり 士朗
文化十三年三月廿七日出 四月八日届

負て出て 子にも鳴する 蛙かな 東陽
ちる花の 其木の身にも 成て見ん 〃
文通

並よくも ならべ弥生の 階子売 逸人
こぼれ梅 中程もなき 匂ひ哉 〔〃〕
窓の虻 もの読されば 出て行ぬ 東陽
文化十三年二月廿二日 六月廿五日従守静届

人遊べ 凧の糸さへ たむる日を 逸人
一ツ家に 鶏の目ほそし 春の雨 〔〃〕
同日来ル

春の夜や 手紙よみつゝ 人の行 ^{逸人悴} 路郭
しひられて 遊ぶや春の 山の家 〃
涼しさや 小笹がくれの 朝料理 李台
弓取の 名もすゝけたり 冬籠 〃

文化十一

『木 公』

灯の影に 見れば雨降る 芒哉 竹有
雪丸メ も一ツ返せ 勢田〔の〕橋 東陽
江口の遊女が草のあと 巾ひける人々のうらやましくて

世をいとふ 種や江口の 時鳥 士朗
我思ひ 皆かげろうふに 立日かな 白図
鳴慣て 行もかへるも 時鳥 蓬山

目ふさげば 耳にこたへる 須磨の秋 岳略
庵の夜は 柳植ても 短しや ^{エド} 北堂
人の家の うらから出たり 春の山 岳略

遠近や 月を八ツ鶏 七ツ鶏 竹有
雨行くや 高根の蟬の 声の前 〃
蚊柱や せんすべなしの 庭せゝり 梅間

杖のあふ友と芒のわけ行て

とぶ螢 ことしは橋を はや引し 同
旅ならぬ 国とはなし 春〔の〕風 ^{ヲハリ} 杜堂
時鳥 旅は枕に つかはるゝ 梅間
大よくに 花見る雨の ^(落カ) 前日哉 岳略
仮着せば 上代染ぞ 春の雨 〃
畠中の 人間赤し 秋の風 〃

文化十四八月卅日認

姥捨

月出て 親負ふ人の 通りけり 東陽
善光寺
 満月に 来ざりし罪も なかりけり 〵
 網代守 人が狐に 化にけり 逸人
 鶯の 遠音にひらく 小門哉 岳輅
 木屋町や 小唄に交る 鉢叩 〵
 鰻汁や 行灯提て 人の来る 岳輅
 有明を 柱にあてゝ 煤はらひ 竹有
文化十五二月十日通、七月十四日届、
 白鶴老人大蘇六十一賀、『風の筋』といふ添
 沙汰なしに 雨は止みけり はつ鯉 梅間
 風少 もちて声よき 雲雀哉 〵
『風の筋』入
 万才に 皆喰れけり 庵の餅 白鶴亭 大蘇
 鶯と ともに日暮る 野みち哉 〵
岐岨道中
 雲と見て 行ば馬籠の 蚊やり哉 〵
 秋の夜や 目覚る度に 人通り 〵
 十六夜や 葎は露も さはがしき 〵
 杖はよき ものよことしも 須磨の浦 女宜公
文化十五正月十五日、大鶴庵代筆(寛か)我覚一通添
『昔 今』一冊来
 としの尾に さはるものゝ葉 皆青し 大鶴庵
 春風や ころころ声の 山鳥 〵
 けふも又 目に見る迄の 時鳥 少女
 春風や 宿引馬の から戻 山芝
 有たけの 紅葉を志賀の 郡哉 岳輅
 こぼれがちに 見ゆるは露の ならひ哉 同
 思ふ図の やうに花あり あらし山 足彦
『夜柱』ニ入
 雲の峰 今にもこけん 松の上 葛斎
 月芒 鳥羽の鳴子も 聞へけり 梅葉
 むだ事に 水のこぼれて 猶涼し 樗老
 後の月 雨もなんぞの 名残哉 士朗
 淋しさや 後の一字も 月の影 岱青
『風の筋』ニ入 付録
 遊女四五人田舎わたらひ
 楽書に 恋しき君が 名もありて
 又
 上置の 干菜きざむも うのは空
 馬に出ぬ日は 内で恋する

又
 棺を急消がたの露
 破れたる 具足を国に おくりけり
 高麗のあがたに 畠作りて
此三ヶ条を得たるを蕉門とす。得ざるを他門とす。
 牛の尾に 暑を叩く 小壁哉 塊翁
 人先に 雀のぬける 茅輪哉 梅間
 古郷や 藪からも来る 月の客 大巢
 春雨の いろは子供や 寺の門 竹有
 門違 しても御慶よ 梅の花 松兄
花は年々に盛有、人は一代に一度の盛ありて、
 としどしに年のよる身こそかなしけれ
 あやかに 花に又ことし 〵
 暑き日や 折々払ふ 足の砂 〵
 餅になれ 月になれとて 田打かな 〵
 迂るなら 京迄すべれ 春の雨 〵
関にて丈草の「町中の山」と云れたるにならひて
 町中の 山にもたれて 涼みかな 〵
 老となる 手がらもなく とし暮ぬ 〵
緑竹園賀
 年も名[も] 涼しくかしく あなかしこ 〵
 鶴は蚊よ 亀は虱よ ふじの山 少女
 月澄て 雪降るところ ところ哉 岳輅
 糸瓜にも 月ある時や ひとり酒 東陽
 染草の 赤坂山や 秋の暮 沙鷗
 鶯や 物のまぎれに 夕鳴す 暁台
 白魚や うき世の闇に 目を開き 〵
 斎僧を けさは雛の 一坐哉 〵
 菜の花の はつはつに見る 都哉 〵
 涼しくも 明行く月を 照る日哉 〵
 月と我と 物思ふころ 雲起る 太策取次
 さくさくと 粟つく師走 月夜哉 〵
 加茂の火を 迹にし先に なく千鳥 〵
 門前の 婆々は下戸也 初時雨 塊翁
 山里に わら家の足らぬ 時雨哉 岳輅
 まはらせる 柳ありけり 鉢敲 大巢
 月は海に ありて風吹く 青田哉 鳳台
 遠晴れの するや芒は 八九月 宜彦

路丈文音
 日本橋音羽町
 中村伊右衛門方

文政四五月十一日没 岳輅

次いで紹介するのは、文化14年(1817)の秋拳(三河)からの来簡である。

〔Ⅱ〕

文十四正月十七日出、同六月三日届、三河小垣江
スリ五葉入、短尺申来ル、 秋拳
見た事か 一夜明たら 花の春 へ
鶯の 隙をあけたる はつ音哉 へ
今もちる 花とはしらで さくらかな へ
野心も たへはて、猫の 丸寝かな へ
六月の 雨や人間 口明いて へ
長月や いかなる日にも 菊の花 へ
雪ならで こんな寒は なかりけり へ
一年や 一年ましに 暮はやし へ
スリ 足助社中

紹介した〔Ⅰ〕、〔Ⅱ〕の記事から読み取れるのはどんなことだろうか。まず「随齋筆紀抜書」に書き留められている尾・三の俳諧師の句が、〔Ⅰ〕のように、断続的に集められた句を一括してまとめられていて、一茶が暁台以後、土朗の時代に入ったことを確認しようとしていることがわかる。「随齋筆紀抜書」のなかで、一地域の俳諧師の句がこれほどまとまって集められている部分は、ここしかない。一茶が、尾・三の俳諧の動向に強い関心を示していた証左となろう。

次に信州の一茶宛に送られてくる郵便物には、書状のほかに、「スリ」と一茶が名づける「摺物」(「俳諧一枚摺」と呼ばれる木版物か)や句集などの小冊子類が同封されていて、一茶はそれを読み、そこに書かれている句をそのまま写し取ったか、その中から選別しておいて、「随齋筆紀抜書」に書き留める作業を日課にしていたことが想像できる。

そしてそこから読み取れるのは、一茶と尾・三の俳諧師との情報伝達の手段が、飛脚による書簡のやり取りであったことだろう。前出の矢羽勝幸さんは、そこにプロの俳諧師が抱える俳諧飛脚が介在し、スムーズに最新情報を伝達していたのではないかと想定している(『信濃の一茶』中公新書、1994年)。

たとえば、〔Ⅰ〕には①「文化十三年二月十六

日出、廿九日入」とあり、また②「文化十五二月十日通、七月十四日届」ともある。また〔Ⅱ〕の「文十四正月十七日出、同六月三日届、三河小垣江」とあるように、発信日と着信日が明記されていることが多く、「文通」のよる情報交換であったことがわかるが、〔Ⅰ〕①のほうはわずかに13日で尾張から届いているのに対し、〔Ⅰ〕②や〔Ⅱ〕は、三河刈谷城下に近い小垣江(現在、刈谷市内)からは、なんと5ヶ月もかかっている。それは俳諧飛脚の利用による違いなど、郵便事情が異なることによるのだろうが、一茶はそれを受け取ると、おそらく尾・三からの書簡類を別置しておき、まとまったところで「随齋筆紀抜書」に記録していったのであろう。

またⅡの前書には、「三河小垣江、スリ五葉入、短尺申来ル」とある。この差出人は、三河刈谷藩士で、引退後小垣江村に通世していた秋拳が、5枚の摺物を送ってきた。一茶は、その中から秋拳の句だけを選別して書き留めた。そして末尾に「スリ 足助社中」と書かれているように、三河の「足助社中」という俳諧結社が催した句会のさいに詠まれた摺物から抜粋し出典を明記した。一茶が秋拳の句に強い関心を示したことがわかるだろう。さらに「短尺申来ル」とあるように、秋拳の書状には、一茶の句の短冊を送って欲しいと書かれて、おそらく一茶はそれに応じて返書を出したことが想像される。しかし一茶は文化14年(1817)の前半は、下総から常陸の鹿島神宮辺を逍遙していた。多分7月初旬に柏原に戻ってから書き留めたのであろう(「七番日記」)。

この他同封されて来る小冊子の多くは、下総佐原の俳諧師恒丸の三回追善集『玉笹』(文化9年刊)や大坂の俳諧師松隣編の句集『木公集』(文化11年刊)、そして「白鶴老人大蘇六十一賀、『風の筋』といふ添」が書き留められている。梅間編の『風の筋』(文化14年刊)、竹有(塊翁)編の『昔今』(文化15年刊)など、尾・三各地で編集刊行された句集が多いが、そのほかに尾・三の俳諧師が編集に関わった句集だけでなく、関東や大坂で刊行された句集も含まれている。そのため蓬山、山芝、葛斎、梅葉など他国の俳諧師や女性の宜公の句が

交っている。しかし一茶は主に尾・三の俳諧師が寄句した句に注目し、その句を書き留めていったことだろう。

最後に、以下の記事を見ておこう。「七番日記」の文化11年(1814)1月23日の記事である。

廿三 晴

素檠、若人二通、善光寺草司ニ出之、
井眉、樗堂、八千坊、桐栖、米彦、魯隠、
長齋、三津人、奇淵、八通 一包。八日坊
万和ニ出之、
巢兆、一瓢、梅寿、道隣、一峨、白老、金令、
久臧、東陽、雪垵、武陵、太策、斗圃、秋元
右十四通成美ニ出之、賃四十八文
武白一通、三百卅六文添、

この記事は、1行目が尾張の暁台や士朗に師事した信濃諏訪の俳諧師素檠と同じ諏訪の若人(士朗門)の一枚摺2通を善光寺門前の俳諧師草司に送ったという記事であり、2行目は大坂在住の俳諧師八日坊万和(臥鵬)へ井眉はじめ9名の一枚摺などを送り、4行目が成美へ14名の同様の摺物などを送ったことが書かれている。いずれも東西の著名な俳諧師の摺物ばかりである。この中の1人に尾張の東陽の摺物が交じっていたことが注目されよう。

つまり信州柏原宿の一茶に寄せられた俳諧情報が、すべて一茶の手元に留められてはいないことを物語る。成美が存命中は江戸へ送られ、またいくつかは門人たちの間に流されていたようである。成美に送られた情報は成美によって選別されて、おそらく手元の「随齋筆記」に書き加えられていたのであろう。そしてその逆もまた当然行われていた。それゆえ時折、成美、一茶双方が同じ句を選句し、「随齋筆記抜書」に書き留められているのを散見するのは、こうした文通の関係からみれば自然の現象であろう(11 松兄、17 卓池、21 梅間の句参照)。

そして以上のような文通を通して知己の関係を持てば、それぞれの俳諧師の動向が気になるのも当然であろう。その点で一茶の日記(「七番日記」)や「随齋筆記抜書」には、文化9年(1812)9月24日の記事(「七番日記」)に

廿四 晴

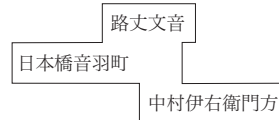
正月元日 素喬没、
五月十五日 士朗没、
八月廿二日 一堂没、
九月十五日 遅月没、

と記されているように、士朗をはじめ江戸、下総、常陸の俳諧師の死亡記事が書き留められ、同年11月7日には

七 晴

木朶 文化七 四月二日没 八十四

と前々年に死没した三河の俳諧師木朶の死亡記事をわざわざ書き留めるほどだった。そして〔I〕の末尾の



文政四五月十一日 没 岳輅

という死亡記事になる。暁台門の重鎮岳輅が江戸で客死したことを丁寧に書き留めているのは、このように各地の俳諧師の動向につねに敏感だったからである。

おわりに

前述したように一茶は尾・三の俳諧師と句会を開くなど直接交流することはなかった。しかし尾・三の俳諧師の動向に深い関心を持っていたことは間違いない。そして尾・三の俳諧師もまた一茶に情報を提供する形で、成美健在時には、一茶が成美と深い関係を持っていることを知っていて、直接成美と繋がるだけでなく、一茶を通じて江戸の成美へ情報を発信する方法も選択したものと考えられる。

そして成美死後は、信州柏原宿に居ながらも一茶が全国の俳諧師と交流する一つの窓口になっていることを認識し、「文通」を通して尾・三の俳諧師たちは情報交換を行ったと思われる。

こうした一茶の全国的な俳諧情報網は、一茶帰郷後の「随齋筆記抜書」の記事を見る限りかなりのもので、矢羽勝幸さんの分析(『信濃の一茶』

第3表 一茶の地域・個人別諸国俳人文通表（信濃を除く）

居所	諸師	通信回数	居所	諸師	通信回数	居所	諸師	通信回数	居所	諸師	通信回数
蝦夷	函館	1	加賀	年緒	1	江戸	国村	1	伊賀	士得	1
陸奥		1	上毛	芽丸	1	"	冬扇	1	京都	杜蓼	7
"	仙台	1	"	二蝶	1	"	諫圃	1	"	金菜	2
"	"	1	"	鶯白	3	"	阿山	1	"	芦丸	1
"	"	2	"	本宿	3	"	逸逸	1	大坂	万和	6
"	"	1	"	保泉	1	"	十老	1	"	木井	1
"	"	1	下毛	日光	1	上総	雨白	1	"	星眉	5
"	"	1	武蔵	熊谷	3	"	子盛	3	"	竺齋	5
"	仙台領三本木	2	"	"	1	"	富津	1	"	星齋	1
"	須賀川	1	"	新深谷	1	下総	流山	2	"	奇米	2
"	二本松	1	"	八王住	1	"	馬橋	13	"	魯長	2
"	本宮	2	"	千住	2	"	銚子	5	"	三津	1
出羽	秋田	2	江戸	成太	34	"	"	1	"	人栖	1
"	"	1	"	一守	29	"	"	1	"	桐松	1
"	巴野	1	"	一守	16	"	"	2	"	屋隣	1
"	御風	1	"	一守	19	"	"	2	"	島	1
越後	高田	1	"	一守	16	安房	杉	4	和泉	喜齋	4
"	"	3	"	一守	11	常陸	翠兄	2	"	荷平	1
"	"	6	"	一守	10	"	尺	3	"	逸	1
"	"	2	"	一守	10	相模	大磯	1	河内	あふむ	6
"	"	1	"	一守	9	"	東浦	2	"	未	2
"	"	4	"	一守	11	"	賀	1	"	長	1
"	新井	1	"	一守	7	甲斐	百有	3	丹波	武	2
"	小千谷	3	"	一守	7	"	漫	1	"	花	1
"	見附	1	"	一守	11	"	陽	1	淡路島	方	1
"	"	1	"	一守	5	"	鱗	3	"	遊	1
"	"	1	"	一守	7	"	有	1	"	壺	1
"	"	1	"	一守	2	駿河	秋	1	小豆島	無	1
"	"	1	"	一守	2	"	逸	2	伊予	物	3
"	"	1	"	一守	2	"	路	1	安芸	堂	3
"	"	1	"	一守	3	"	梅	1	長門	老	2
"	"	1	"	一守	2	"	具	1	筑後	風	1
"	"	3	"	一守	3	"	雨	1	"	月	1
"	佐渡	3	"	一守	2	"	馬	2	"	五	1
越中	堺	1	"	一守	2	飛騨	丁	1	肥後	和	4
"	"	1	"	一守	2	近江	于	2	不明	舟	1
"	富山	1	"	一守	1	"	島	1	"	"	1
"	"	1	"	一守	1	伊勢	丘	1	"	"	"
"	氷見	1	"	一守	1	"	高	1	"	"	"
"	"	1	"	一守	1	"	堂	1	"	"	"

中公新書、1994年)によれば、第3表に示したように信州を除いて35ヶ国に及ぶ。それに「七番日記」「文政日記」の記事を加えれば、その数はさらに多くなることだろう。それに直接柏原宿の一茶宅にも足を運び交流した俳諧師も跡を絶たなかったという。つまり一茶は化政期俳壇における最大の情報通であったと言っても過言ではない。

また矢羽さんは、信州に帰郷後も全国で刊行された句集や俳文集にも目配りし、諸国俳諧師の俳風などを知る情熱を失わなかったという。矢羽さん作成の一茶が入手した俳書数に関する統計(「俳人番付からみた一茶」『一茶の総合研究』信濃毎日新聞社、1987年)では、第4表のように故郷定住期がもっとも多く、毎年約8冊の俳書を購入し、江戸での生活期の7冊を上回っている。その点から見ても俳諧情報収集の情熱は晩年まで衰えることがなかったと言えるだろう。

いまで言う脳梗塞による手足の不自由、歩行困難を押しての門人宅廻りを繰り返しながら、「柏

原に帰れば、「昼夜炬燵弁慶」(「文路宛書簡」文政7年11月、『一茶全集』第6巻)という状況のなかでの作業である。それは一茶への手紙の整理だけではない。あわせて返書を認める作業の繰り返しである。しかも結構長文の手紙を書き、きまって一句か二句が添えられている。(「一茶の手紙 — 一茶の交遊をさぐる」2012年度一茶記念館企画展示)。つまり、そこまで気配りをしてまでの情報収集である。その俳諧への情熱と執念に頭が下がる思いである。

最後になるが、以上のような観点から、一茶が「差添」に名を連ねる、文政4年版の俳諧番付『俳諧士角力番組』にランクづけされた俳諧師らの実力は、そこに登場する尾・三の俳諧師を見るかぎり、ランクづけの通りであろう。彼らが暁台→士朗の門人で、二人の俳風を受け継ぎ、しかも地域リーダー的な存在であることを的確に判断していたことは間違いない。

おそらくそれは諸国の俳諧師に対しても言えることで、一茶が俳諧番付の判別者として中央の柱

に名を連ねても誰からも疑問視されることなく、逆に、そこに一茶の名があれば、それが信用されるほど高い評価を受けていた実力者であったと言ってもよいだろう。

ただ同様なことを番付の柱に名を連ねた俳諧師にも当てはまるかどうかは、いまのところわからない。なぜなら彼等は一茶ほど俳諧活動の記録を残しておらず、一茶ほどの情報通ではなかったと思われるからである。その点でいえば勸進元の尾張の竹有や大坂の奇淵が、多くの門弟をかかえ、かなりの数の句集や俳文集の編集を手がけていて、地域では高い評価を受けていた俳諧師には違いないが、どれほどの情報通であったかはいまのところわからない。わかるのは、兩人とも一茶と深くかかわっていて、彼等から「差添」を頼まれれば承諾せざるを得ない関係であった点ぐらいであろう。

以上、今回は尾・三の俳諧師と一茶の関わりについてのみ限定したが、今回は一茶と諸国俳諧師との関係を追求し、本稿で示した観点をさらに深めてみたいと思う。

〔注〕第3表に駿河・東陽とあるが、本稿では文化8年(1811)刊の『正風俳諧名家勅組』「東の方」5段目に「同 尾州 東陽」とあり、文政4年(1821)刊の『俳諧勅番組』にも「東の方諸国」の4段目に「尾州 トウヤウ 東陽」とあるので尾張の俳諧師とした。矢羽勝幸さんが何をもって駿河の俳諧師としたか不明である。もしそうだとすると「随斎筆紀抜書」の記述からみて、東陽が尾張の俳諧師と深くかかわっていたことだけは間違いない。

第4表 一茶入集俳書数(刊本)
()内は部数計

	刊 年	部数
修 業 期 (29)	天明 7	1
	同 8	2
	寛政 1	3
	同 2	3
	同 3	1
	同 4	1
	同 7	3
	同 8	4
	同 9	6
	同 10	5
江 戸 流 寓 期 (91)	寛政 11	9
	同 12	8
	享和 1	2
	同 2	3
	同 3	2
	寛政-享和	2
	文化 1	4
	同 2	7
	同 3	4
	同 4	6
	同 5	2
同 6	12	
同 7	9	
同 8	9	
同 9	12	
故 郷 定 住 期 (110)	文化 10	13
	同 11	9
	同 12	5
	同 13	4
	同 14	8
	文政 1	8
	同 2	10
	同 3	10
	同 4	9
	同 5	5
	同 6	3
同 7	10	
同 8	5	
同 9	6	
同 10	4	
文政期	1	